

コロナ禍以降の国際交流の在り方について

International Exchanges after Covid-19 Pandemic

中村学園大学 流通科学部

池田 祐子

1. はじめに

2020年1月に発出された世界保健機関（WHO）による新型コロナウイルス関連肺炎に関する緊急事態宣言以降、海外への渡航制限と国際交流に対する意識の変容により、グローバル人材育成は厳しい状況に置かれている。2020年7月31日に、文部科学省の官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」は、留学先の国・地域の危険情報レベルが1以下になったら必ず海外の受け入れ機関で実践活動を行うことを条件に、日本でのオンライン留学を開始すると発表した¹。当時、中村学園大学にも日本学生支援機構から留学奨学金を得て渡航を待っている多くの学生がいたが、世界的なパンデミックに留学自体を諦める者、次年度に望みを繋いで出発を延期する者と、決断は違えども全員が計画変更を余儀なくされた。感染収束が見えず、いつになれば渡航できるのかも不透明な状況のまま、グローバル教育はパンデミックと共生する道を探ることになった。

中村学園大学流通科学部では、グローバルかつローカルに活躍できる人材育成プログラムの質的向上を目指し、「学力の3要素」を基軸としたグローバル教育の推進を掲げ、アクティブラーニングの視点から教科横断型で取り組む英語力向上のプログラムや、海外研修の質的向上を課題としている。本稿では流通科学部におけ

るコロナ禍前後のグローバル教育の実践活動を報告し、今後の課題について述べたい。

2. 人材育成プログラムの質的向上のための取組

流通科学部では、人材育成プログラムの質的向上のため、以下の3点に注力した。

（1）流通科学部海外留学スカラーシッププログラムの充実

出口を意識した留学条件の厳格化と、留学先での活動支援の充実を図った。2021年度には、派遣学生の語学学校での学修を原則として留学開始より最大で6ヵ月とし、それ以降は派遣先の大学で科目等履修を行うことを条件とした。2022年度には、奨学生は派遣期間を問わず、語学力の向上に加え、①カレッジ科目の履修、②ボランティア活動への参加、③インターンシップへの参加、④フィールドワーク（アンケート調査等）の実施のいずれかを行うこととした²。派遣学生は上記①～④の円滑な進捗のため、指導主任を中心に教職員による遠隔指導を受けるものとした。

（2）プレイズメントテストとしての TOEIC Bridge[®] Listening & Reading Test の導入

TOEIC Bridge[®] Listening & Reading Test を新入生オリエンテーションで実施し、英語のプレイズメントテストとして活用することで、

1 2021年8月以降は、9か月以上留学する場合に限り、外務省の定める感染症危険情報レベルが2または3の国・地域に派遣する学生についても、奨学金の支給を認めることが通知された。

2 中村学園大学「流通科学部海外留学スカラーシッププログラム」募集説明会資料：「流通科学部海外留学スカラーシッププログラムについて」（令和3年度、令和4年度）

早期の英語の資格獲得への動機づけを行った。また、1年次生の必修授業にe-learning教材ALC NetAcademy Next (TOEIC®L & R テスト 500点、600点、730点突破コース)を組み込むことで、1年次生全員がTOEIC受験対策を行うと同時に、流通科学部海外留学スカラシッププログラム派遣を目指す学生のTOEICスコアの引き上げを図った。

(3) 教科横断型で取り組む海外アクティブラーニングプロジェクトの立案と実施

学部内の領域横断型プロジェクト研究「グローバル人材育成のための先進的事例の調査研究ならびに教育現場への還元」(2019-2021)のため、海外の協定校との連携を強化してアクティブラーニングプロジェクトを実施した。予定では2019年度から2020年度にかけて二か年計画のプロジェクトであったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により2021年度まで期間を延長した。

本稿では上記(3)に当たるグローバルリンクプロジェクト(2019)およびグローバルプロジェクト(2021)について振り返ることで、コロナ禍以降の大学における国際交流の在り方について考察したい。

3. グローバルリンクプロジェクトの立案と実施

朴教授、マキネス講師と筆者は2019年に、流通科学部の特性を活かした海外研修の実施を目指し、協定校のグアム大学でアクティブラーニングを行う「グローバルリンクプロジェクト」を立ち上げた。これは学生が福岡とグアムについて調査し、両地域をリンクするための交流案を広義の流通の視点で捉えて提案するアクティブラーニング型の海外研修プログラムである。プログラムの発足以前から、本学には学部間共通の科目としての海外研修があり、アメリカと

オーストラリアの協定校で三週間の語学研修と異文化体験を行ってきた。一方、流通科学部ではかねてよりアクティブラーニングを重視し、課題解決型学習やプロジェクト型学習を積極的にカリキュラムに導入してきたため、海外研修においても学生が語学だけでなく専攻に沿った調査や研究の機会を得ることを目的に本プログラムを企画した。

グローバルリンクプロジェクトは事前研修10回、事後研修5回とし、渡航期間は2019年8月9日～8月31日(23日間)とした。事前研修で学生は三班に分かれ、一班はグアムの歴史・文化、二班は食料・流通チャンネル、三班は観光と地域経済について事前調査および資料作成を行った。事前研修の一貫として、本学の「観光論」担当の前嶋准教授に講義「Tourism Study on Guam」を依頼し、学生は観光都市グアムにおけるフィールドワークの端緒を得て、現地の観光関連施設を巡りながら福岡とグアムをリンクするための交流促進案を練った³。

現地では、学生はグアム大学提供の英語研修およびグアム文化体験プログラムのEnglish Adventure Program(以下EAPと略記)を午前9時から午後3時まで受講し、アクティブラーニングのための現地調査はEAP後の放課後や週末を利用して、引率者の朴教授の指導の下で安全に配慮しながら行った。現地調査のために巡った場所は、表1のとおりである。

帰国後、学生は調査内容をまとめ、プレゼンテーションのためグループワークを重ねた。三班はそれぞれプログラム参加者体験報告会で成果報告を行った。学生にはプレゼンテーション資料とは別に個別のレポートを課し、筆者はプレゼンテーションとレポートによって成績評価を行った。

研修後に実施した学生へのアンケート調査から、アクティブラーニングに必要な時間は二週

3 池田祐子「流通科学部『グローバルリンクプロジェクト』調査報告」『流通科学研究』vol.19 no.2 2020 41-47.

表 1

<p>【歴史・文化班】 イナラハン地区の歴史遺跡、ヨナ地区の海洋資源保護、チャモロ先住民文化村、ナイトマーケット</p> <p>【食料・流通チャンネル班】 モール、ディスカウントストア、スーパーマーケット、地場コンビニ、アプラ港、商業港地区</p> <p>【観光・地域経済班】 チャモロ先住民文化村、ナイトマーケット、ビジネス・行政のハガニア地区、タモン地区の観光マーケティング施設</p>

出所：グローバルリンクプロジェクト計画書より筆者作成

間という結論に至った。またタモン地区から各観光名所に出ているバスツアーを利用することで、交通手段の効率化を図れることが分かった。当初、大学寮からタモン地区への交通手段の少なさが懸念事項であったが、引率者不在の間、学生はタクシーアプリの Stroll を使い寮からタモン地区に移動していた。これにより、学生のみアクティブラーニングの可能性についても関係者間で協議したが、学びの充実と深化のためには各場面における教員指導の必要性を感じ、次年度に向けて2週間に短縮した引率型プログラムを検討することとなった。またグアム大学関係者からの情報を得て、海外研修の実施時期をグアム大学の Charter Day（創立記念日）に合わせることを決定した。この日はグアムの様々な文化的催し物がキャンパスで行われるためである。また、現地の学生ボランティアをアクティブラーニングに同行してもらうことも次年度の検討事項とした。こうしてグローバルリンクプロジェクトは、研修期間・研修時期・宿泊先・プログラム内容について精査し、より探求的な学習プログラムとして発展させる予定であった。

4. 国内外の先進的事例の収集

しかし、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大により渡航が制限され、本学では9月末時点の外務省ウェブサイトにおける渡航中止勧

告を受けて、全ての海外留学の実施を断念した。感染症のパンデミックを機に、アクティブラーニング型海外研修の在り方も再考することになった。筆者は過去のグアム大学における他学の研修事例と、新たな形態のオンライン海外研修について調査し、コロナ禍以降の海外アクティブラーニングの在り方を検討した。グアム大学が短期語学研修生を受けれている日本の教育機関の中から、秋田県立大学、多摩大学、龍谷大学、岡山理科大学、岐阜市立女子短期大学、専門学校から佐賀市医師会立看護専門学校、静岡福祉医療専門学校の事例を取り上げ、グアム大学におけるフィールドワークの可能性を探った⁴。

どの教育機関も、学生または生徒に応じたプログラムを提供するため、特徴的な活動を取り入れていた。システム科学技術や生物資源科学を専攻する秋田県立大学の学生（2014, 2016）は、グアム大学持続的発展研究センター訪問でSDGsへの知見を深め、トリトン・ファームで作業実習を行い、ボランティアとしてパセオ公園清掃活動を行っている。また、教育・福祉を専攻する学科を中心として、複数の教育機関が地元の教育施設で研修を実施している。秋田県立大学システム科学技術学部・生物資源科学部（2014, 2016）は、キャプテン・ヘンリー B. プライス小学校で4年生を対象に「日本文化の紹介と昔の遊び体験」を行い、独楽、けん玉、

4 池田祐子 [2021]「グアム大学における語学研修の近状と今後の展望」『流通科学研究』vol.20, no.2 2021 pp.35-37.

折り紙あそび等で現地の小学生と交流した。グアムの小学生は伝統的なチャモロ語やチャモロダンスの授業を受けており、参観によって文化的知見を得ることも可能である。また、静岡福祉医療専門学校介護福祉学科・総合福祉学科(2019)は、幼稚園から高校まで同じ敷地内にある教育施設セント・ポール・クリスチャン・スクールで子どもたちに日本の物語を英訳した絵本を読み聞かせ、折り紙を教えるといった文化交流体験をしている。岡山理科大学教育学部(2017)も地元の小・中・高校で児童と共に課題に挑み、英語と体育の授業に参加し、グアムにおけるITC教育の最前線について特別講義を受けている。静岡福祉医療専門学校介護福祉学科・総合福祉学科(2019)の研修生は、異文化交流として老人施設の利用者と紙相撲とつるし難作りを行い、佐賀市医師会立看護専門学校(2019)の学生はグアム・リージョナル・メディカル・シティ病院で、グアムの医療設備、医療費、国民の健康に関する意識、平均寿命などを学習した。

これらのアクティビティに共通するのは、グアム大学を研修の拠点としながらも学外の施設を訪問している点である。地元の人々と共同作業を行うことで、学生はコミュニティに関われたという満足感を得られるだろう。グアム大学にはホームステイ制度がなく、留学生が地元の人々と交流するためにはキャンパスの外に出ていく必要がある。流通科学部が目標に掲げる

「両地域をリンクするための交流案」も、現地の幅広い年齢層や共同体にアクセスすることが有効と考えられ、様々な人々と研修の機会を持つことは、研修生にある程度の緊張感をもって事前事後学習に臨ませるための効果的な試みになるといえよう。

5. オンライン語学研修の事例

グアム大学は2020年の夏に芝浦工業大学と共同でオンライン語学研修 Virtual English Adventure Program を実施している。同大学の実施報告書によると、1日4時間半、総学習時間約28時間の語学研修で、プログラム費用は\$450、1クラス9人から18人でBeginnerとIntermediateの2レベルに分かれている。授業では英会話の他に理工系のトピックを扱い、プログラムにはグアム大学の学生との交流や、会話セッションも含まれる。他学に先駆けて、グアム大学提供のオンライン海外研修を実践した貴重な事例である⁵⁾。

さらに、グアム大学は2020年秋、新型コロナウイルス感染症対策として新たなオンラインプログラム Explore Program を提供している(表2)。Explore Program は月曜から木曜の午前10時から午後12時(日本時間で午前9時から午前11時)に行われた8日間のプログラムで、2020年9月から11月まで3期にわたって実施された。語学講座と文化体験レッスンを組み合わせたものだ。2021年度もコロナ禍で渡航出来な

表2 Explore Program の概要

<p>Explore Program (Experience Learning Online Refined English) Quick and easy lessons to improve your English by ESL instructors with years of experience Travel to Guam through cultural lessons and interactive activities Create friendship with University of Guam students through conversation exercises Registered students will receive a 15 % discount</p>

出所：グアム大学ウェブサイト 2020年12月閲覧

5 池田祐子 [2021] 「グアム大学における語学研修の近状と今後の展望」『流通科学研究』vol.20, no.2 p.38

いとしたら、オンラインのグローバルリンクプロジェクトを実施する必要が生じる。グアム大学提供の英語プログラムと組み合わせながら、どのくらい学部希望に則したアクティブラーニングをオンライン上で実施できるか協議することとなった。

6. オンライン海外研修の立案

2021年の初夏の時点で、引き続き新型コロナウイルス感染症の影響で渡航を伴う海外研修は困難になると判断し、海外研修をオンラインで企画した。本学は2020年度と2021年度に全学部対象の海外研修の代替案として、オーストラリアの協定校と行うオンラインサマープログラムへの参加者を募集していたが、応募者は2020年度が1名、2021年度は0名だった。約60,000円、バーチャルホームステイ付きは71,000円という高めの料金設定が原因の一つと考えられた。コ

ロナ禍が続き、学生がオンライン授業に飽きている様子も窺え、海外研修の代替手段としてオンラインプログラムに学生を募集するのは容易ではない中、グローバルリンクプロジェクトは流通科学部の新カリキュラム科目「グローバルプロジェクト」と統合し、正課科目としてオンライン実施を試みることになった。グローバルプロジェクトは授業担当者である河原准教授の指導の下、国際知識の学習に基づくアクティブラーニングとして、新たな体制での実施を目指した。夏季集中講義で、事前研修として令和3年8月2日～5日（4日間）に河原准教授による講義が行われ、8月23日～9月3日（10日間）はグアム大学提供のオンライン語学研修を実施し、事後研修として9月7日（1日間）に成果発表を行うというものであった。グローバルプロジェクトのテーマ（ねらい）、到達目標、特徴、スケジュールを表3に記す。

表3 グローバルプロジェクトの概要

<p>【テーマ（ねらい）】</p> <p>本科目は、流通科学部が教育目標として掲げるグローバル人材育成を目指し、協定校であるグアム大学（UOG）と10日間の【オンライン英語研修】（COIL: Collaborative Online International Learning）を実施するアクティブラーニング型研修プログラムである。具体的に、福岡とグアムにフォーカスし、教員指導の下で「両地域をリンクするための交流促進案」を検討し、COILの最終日にオンライン上で英語によるプレゼンテーションを行う。また、学生の幅広い視野を養うために、日本と関係性の深いアセアンの国々について学ぶ機会を設定する。</p>
<p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 協調性、責任感、コミュニケーション、プレゼンテーション能力などの汎用的な能力と課題解決能力を養うことができる。 2. アクティブラーニングを通して、実践的な英語力を向上できる。 3. アセアンの基礎情報を学び、経済先進国以外の重要性を理解できる。 4. グローバルプロジェクトを通して、幅広い視野の獲得と今後の自信を身につけることができる。

【特長】

1. 安心（海外に渡航せずに、安心して異文化コミュニケーションを経験できる）
2. 充実（グローバル人材に必要な英語力と国際知識を同時に学修できる）
3. 価格（350ドルのオンライン英語授業を原則*無料で受講できる）

*但し、本科目は、参加費用が発生する場合がある。費用の目安：【約1～2万】程度（申込人数次第）

*但し、本科目は、履修申込状況により、本科目の申込を制限あるいは中止する場合がある。（注意事項）

スケジュール 第一ステージ	
2021/8/2	09:00-10:30 オリエンテーション、10:40-12:10 アジア諸国を知る①タイ他
2021/8/3	09:00-10:30 アジア諸国を知る②ベトナム他、10:40-12:10 プレゼンテーション基礎①
2021/8/4	09:00-10:30 アジア諸国を知る③インドネシア他、10:40-12:10 プレゼンテーション基礎②
2021/8/5	09:00-10:30 アジア諸国を知る④シンガポール他、10:40-12:10 プレゼンテーション基礎③
第二ステージ	
2021/8/23	COIL by UOG (9:00-12:00 Welcoming and Introductions Assessments, 13:00-14:30 English Classes Conversation)
2021/8/24	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/8/25	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-13:30 Special Topic)
2021/8/26	10:00-11:30 (English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/8/27	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Conversation)
	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/8/30	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/8/31	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/9/1	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-13:30 Special Topic)
2021/9/2	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/9/2	COIL by UOG (10:00-11:30 English Classes Integrated Skills, 12:30-14:00 English Classes Reading and Writing)
2021/9/3	COIL by UOG (10:00-11:30 Student Presentation, 12:30-13:30 Closing Certificate Presentation)
第三ステージ	
2021/9/7	(09:00-10:30 プログラム参加者体験報告会、10:40-12:10 まとめ)

出所：河原繁憲准教授「中村学園大学集中講義 GLOBAL PROJECT 募集説明会資料」

グローバルプロジェクトは、事前学習では日本とアセアンの関係について学び、国際的な視野を広げた上で、日本とグアムの交流促進案を考えるアクティブラーニングである。オンラインのため研修にかかる費用はグローバルリンクプロジェクトの約10分の1であり、大学からの支援金と参加人数次第で参加が無料となる可能性もあった。これまでの他のオンラインプログラムの申し込み状況から見て、参加費の負担が小さければ、学生は集まるのではないかという期待があった。

しかしながら、グローバルプロジェクトの参加希望者は6名で、最少催行人数の15名に達せず、実施を見送らざるを得なかった。グローバルプロジェクトのプログラム自体は学生にとって魅力があったことが、表5の説明会参加者へのアンケートから伺える。オンラインの海外研修は、無料であれば参加者が集まる可能性が高い。逆に言えば、渡航を伴うなら数十万円の費用でも参加したいと思う一方で、オンライン海外研修に参加費を払ってまで参加したいと思う学生は多くないということも改めて浮き彫りとなった。さらに、アンケートの「時間がない」「日程がインターンシップと重なってしまう」という自由回答から、大学3年次生の多忙さも露わになった。グローバルプロジェクトは学部のグローバル人材育成プログラム科目であり、3年次生のみが履修できる。2年次までに培った理論に基づき「グローバルビジネス総論」や「グローバルビジネス各論」と並行して履修できる科目である。しかし、3年次の夏季休暇中にインターンシップに参加する学生は年々増え、科目履修生を3年次生に限定すると、グア

ム大学の提示する最少催行人数15名を集めるのが極めて困難である。よって、今後オンライン海外研修・海外アクティブラーニングを実現するには、①学年を問わない、②無料とする、④放課後や週末に行う、これらの条件を満たすプログラムとする必要があるだろう。国内で1対1の外国人講師のレッスンが受けられる「オンライン英会話」サービスが乱立している今、大学が学生に提供するオンライン留学プログラムは、これらと差別化を図らなければならない。

7. 学生のオンライン留学に対する意識調査

2020年の春に新型コロナウイルス感染症拡大のため留学途中で帰国し、協定校の授業をオンラインで3か月間受講し続けた学生2名と、2021年11月より留学を実現したものの、留学先の感染対策により日中は対面授業、夜はオンライン授業を受講している学生1名に、オンライン留学の利点と欠点を尋ねた。協定校が提供するオンライン授業を経験した学生の率直な意見から、オンライン留学のメリットとデメリットを探るためである。

オンライン留学のメリットについては表6のとおり回答があった。予想よりもオンラインのメリットが少ない結果となった。①のみがメリットを挙げている。興味深いのは学習内容ではなく人との交流をメリットとしている点である。

次に、オンライン留学のデメリットについても聞いた(表7)。メリットと比べて、多くのデメリットが挙がる結果となった。①～⑧までは日本のリアルタイム授業の問題点と変わらない。日本でも、通信料を節約したい、Wi-Fiを

表5

「グローバルプロジェクトを履修したいと思いますか。」(回答者66名)	
・履修したい	5名
・無料であれば履修したい	50名
・履修したいとは思わない	11名

グローバルプロジェクト説明会アンケートより筆者作成

表 6

<p>【オンライン留学のメリット】</p> <p>① 移動時間や交通費がかからなかったこと。日本に帰った後でも、現地での友達や先生と連絡が取れること。クラスみんなの近況を知れること。</p> <p>② 授業面ではあまりメリットは見られなかった。</p> <p>③ 個人的にはありません。</p>

オンライン留学経験者アンケートより筆者作成

表 7

<p>【オンライン留学のデメリット】</p> <p>① 先生やクラスメイトとのコミュニケーションが取りにくい時があった。</p> <p>② 対面授業と比べると、どうしても堅苦しくなる。</p> <p>③ 通信のラグがあるため、スムーズに会話することができない。発言が被ったりしてやりづらい。</p> <p>④ 通信が悪い。ブレイクアウトルームで話さない人間がいる。先生からの一方的な講義になりやすい。対面授業に比べて発言にやや躊躇ってしまう。</p> <p>⑤ カメラ、マイクがオフだと、授業に参加しているという意識が薄れがちだった。 →グループディスカッションで呼びかけても会話に入っていない生徒がいるなど。 →オンラインだと対面のように360度見渡せるわけではないので、テレビ番組を見ている様な、相互コミュニケーションだという意識が薄れるのかもしれないと思った。</p> <p>⑥ 先生たちは動画や画像を使ったり、チーム分けして話し合いを円滑にさせたりなどの工夫をしてくれたが、対面授業を経験していたので face to face で会話ができない時点でかなりストレスを感じていた。</p> <p>⑦ 先生は生徒の理解度を見極めるのが対面よりも難しくなるため、確認のためのホームワークが多くなり、勉学を義務的にしている感が出て楽しく学べない。</p> <p>⑧ やる気が出ない。画面を見続けるので疲れる。</p> <p>⑨ 授業中は英語の環境であるが、日常生活は日本の環境であるため、英語脳を作るのが難しい。</p> <p>⑩ 授業以外での放課後や休憩時間の何気ない会話が語学力向上の大きな要因であると感じていた ので、それがなくなるのがストレスだった。</p>

オンライン留学経験者アンケートより筆者作成

安定させたい、顔出しに抵抗があるという理由でカメラをオフにしたがる学生は多い。このことが、顔を出している学生たちの学習意欲を削ぐことに繋がるという。ただし、これは受講者の顔出しを条件にすれば解消することであり、顔を出していれば呼びかけられても応答しないということは考えにくく、オンラインコミュニケーションにおける居心地の悪さが少しは改善されると期待したい。おそらく、協定校の対面授業の良さを知っている学生にとっては、⑨⑩がオンライン留学に対する最も大きな不満では

ないだろうか。つまり、授業以外で得られるはずだった学びの機会の欠如である。

アンケートには、協定校でのオンライン留学やオンライン海外研修を後輩に勧めるか、またその理由も書いてもらった。

三者ともオンライン留学やオンライン海外研修は勧めないと回答した。三者の回答からは共通した価値観が浮かび上がる。①は海外の友達を作ることに意義を感じ、②はホストファミリーとの会話や現地の生活で身についた英語力や考え方に価値を見出し、③は日常生活や人と

表 8

- | |
|---|
| <p>① 勧めません。意味が無いと思います。また、オンライン留学は真の留学とは言えないので、それらもお勧めしません。オンラインでもいいから海外の講義を受けたい、経済面が苦しい、英会話（オンライン含む）はしたくない、なんとか海外の友達を作りたい、といった理由がある学生になら参加する意義があると思います。</p> <p>② オンラインの留学は勧めません。ホストファミリーとの会話や、現地で実際に生活して身についた英語力、考え方に価値を感じているので、オンラインで海外の授業を受けるのであれば、日本で1対1の英会話教室に通う、検定の勉強をするなどした方が有効に時間を使えると思いました。</p> <p>③ 勧めない。留学している感がなく、楽しみや目標、やる気が出ないので質素な語学学習になるから。留学で得られる学びのほとんどが授業からではなく日常生活や人との触れ合いであるため、それが体験できないオンライン留学はお勧めしない。単純な語学力アップを狙うなら良いと思うが、それが自分にとっては留学とはいえない。</p> |
|---|

オンライン留学経験者アンケートより筆者作成

のふれあいが学びの元であると述べている。つまり、学生が海外と繋がる場面で期待するのは、現地の人々とのコミュニケーションに拠るところが大きい。オンラインの海外研修を企画する際には、協定校の学生と十分な交流の時間をもてるプログラムを組むこと、これが学生のやる気を喚起する可能性がある。

英会話に自信のない学生たちにとって、オンラインでの会話中心の交流は敷居が高いことが予想される。それならば、日本語を学んでいる協定校の学生と、英語を学んでいる本学の学生とで、互いの外国語学習をサポートし合うようなグループワークも一案である。共通のテーマを設定し、互いの国の文化や商品を紹介する動画を、協定校の学生は日本語で、本学の学生は英語で作成してはどうだろうか。お互いの言語を添削し合い1本の動画を完成させた後、他グループとシェアするというアクティブラーニングも可能である。他のペアの動画を観るのも楽しく、勉強になるだろう。マーケティングやSDGsなど流通科学部の授業で学んだ知識に基づいて日本の商品を分析し、協定校の学生に発表し、日本と海外の商品の違いについて理解を深めるのも良いだろう。活動の中で互いの国の価値観の違いも露わになると予想される。総じて日本の学生は英語を学ぶ側であり、国際交流

においてはコミュニケーション弱者となりがちだが、相手が日本語を専攻する学生であれば、お互いの言語を学ぶ者同士対等な立場で接することが出来る。次年度のオンライン海外アクティブラーニングにおいて、こうした可能性を念頭に置きながらプログラムを構築していきたい。

8. おわりに：2022年度のCOILにむけて

次年度、流通科学部では短期大学部キャリア開発学科とCOILプログラムの実践を予定している。中村学園大学では学生部と各学部の協働で2020年度よりCOIL (Collaborative Online International Learning = COIL) が行われている。COILは海外の大学との国際協働オンライン学習プログラムであり、ICTを用いた新しい国際交流の形として、あるいは既存の留学プログラムをより充実させる手段として活用が期待されている。短期プログラムで料金は発生せず、学生に負担のない日数を組むことが可能だ。2020年度は、本学の栄養科学部および短期大学部食物栄養学科がハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジと両地域の食文化の紹介と調理実習を行った。2021年度は、本学の教育学部と短期大学部幼児保育学科がフィンランドのトゥルク応用科学大学と教育をテーマに協働

学習を実施した。2022年度は、流通科学部とキャリア開発学科が主となる予定である。過去二年間のCOILプロジェクトによる知見を活かしながら、学生が意欲的に海外の学生と交流するオンラインプログラムの実現に向けて協働していきたい。

箕面(2017)は海外アクティブラーニングでは「ふりかえり(リフレクション)」が重要であると述べている(26)。また、藤原(2017)は「英語にこだわることなく、国境を越えて移動し、国家を超えた多文化な視野をもって、連帯、扶助のコミュニティを自覚して行動できる『グローバル市民』の育成」(45)において、海外体験学習は短期でも社会性、市民性の涵養に強みを発揮すると述べ、ふりかえりの重要性を説いている。特にループリックの効果は「基準を示すことによる学生の行動の変容の促進」(藤原 56)である。中山・東(2017)は、海外体験学習の直後、大学卒業直前、就職1年後に同じ設問に回答してもらい、ふりかえりを複数行うことで、留学体験者の学びの変容を調査している。欧州においては、留学経験がcareer employability(雇用され得る能力)に与える影響について、経年的な調査の結果「欧州では近年留学経験をもつ者が増え留学経験が当たり前となってきたおり、留学の有無によるエンプロイアビリティへのインパクトが弱くなってきているのではないかと指摘されている」(新見 37)という。本学の学生も帰国後、就職活動で留学のアピールの仕方が分からないと吐露することがある。現地に何年も滞在している日本人に会うと、長くても滞在期間が1年のスカラシップ留学の学生たちは、自分の英語力に自信をなくしてしまうことがある。このような事態を防ぐためにも、我々はリフレクションを上手く活用し、学生に自信を与え、意義を十分に感じさせる留学、海外研修、海外アクティブラーニングを作っていかなければならない。

※本稿は、研究ノート①池田祐子(2020)「流通科学部『グローバルリンクプロジェクト』調査報告『流通科学研究』(vol.19, no.2, pp.41-47) および②池田祐子(2021)「グアム大学における語学研修の近状と今後の展望」『流通科学研究』(vol.20, no.2, pp.35-40)を大幅に加筆修正し、プロジェクト研究(2019-2021)の成果としてまとめたものである。

グローバルリンクプロジェクトの共同研究者である朴晟材教授、スコット・H. マキネス講師、学生に講義をしてくださった前嶋了二准教授、そして本研究に多大なご協力をいただいたグローバルプロジェクトご担当の河原繁憲准教授に厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- ・秋田県立大学(2015)「グアム大学夏期語学研修報告集 2014年9月7日～9月21日」
http://www.akita-pu.jp/up/files/www/renkei/kokusai/kouryusitu_news/20150428091538.pdf (2020.11.30閲覧)
- ・秋田県立大学(2017)「グアム大学夏期語学研修報告集2016.9.4-9.18」
https://www.akita-pu.ac.jp/up/files/www/renkei/kokusai/kouryusitu_news/20170216171552.pdf (2020.11.30閲覧)
- ・池田祐子(2020)「流通科学部『グローバルリンクプロジェクト』調査報告」『流通科学研究』vol.19, no.2, pp.41-47
- ・池田祐子(2021)「グアム大学における語学研修の近状と今後の展望」『流通科学研究』vol.20, no.2, pp.35-40
- ・岡山理科大学(2017)「グアム大学研修2017」
<https://www.ped.ous.ac.jp/guam/> (2020.11.30閲覧)
- ・河原繁憲(2021)「中村学園大学流通科学部集中講義GLOBAL PROJECT 募集説明会資料」
- ・グアム大学公式ホームページ <https://www.uog.edu/> (2020.11.30閲覧)
- ・グローバル学会5周年記念出版編集委員会(2018)『グローバル人材育成教育の挑戦:大学・高校での実践ハンドブック』IBCパブリッシング
- ・国際交流基金(2019)「グアム(2019年度)日本語教育 国・地域別情報」

- <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/guam.html> (2020.11.30閲覧)
- ・子島進、藤原孝章編 (2017) 『大学における海外体験学習への挑戦』 ナカニシヤ出版
 - ・佐賀県医師会立看護専門学校 (2019) 専門課 3年生グアム語学研修
<https://saga-kangaku.jp/blog/000773.html> (2020.11.30閲覧)
 - ・静岡福祉医療専門学校 (2019) 「グアムへ海外研修修学旅行に行ってきました！」
<https://www.can.ac.jp/fukushi/news/detail/?id=59> (2020.11.30閲覧)
 - ・芝浦工業大学 (2020) 「芝浦工業大学、グアム大学と共同でオンライン語学研修を実施」
<https://www.shibaura-it.ac.jp/news/nid00001255.html> (2020.11.30閲覧)
 - ・芝浦工業大学 (2020) 「2020年夏期グアム大学オンライン語学研修実施報告」
<https://www.shibaura-it.ac.jp/albums/abm.php?d=462&f=abm00011348.pdf&n=2020summerUOGreport.pdf> (2020.11.30閲覧)
 - ・高階 悟 (2015) 「グアム大学夏期語学研修と秋田県立大学のグローバル化への取り組み」『秋田県立大学総合科学研究彙報』 16、pp.85-90
 - ・多摩大学経営情報学部 (2014) 「多摩大生の多様性強化のための『初めての海外旅行』調査研究」
https://www.tama.ac.jp>smis_collaborative_research2014 (2020.11.30閲覧)
 - ・中村学園大学学生部 (2019、2020、2021) 「流通科学部海外留学スカラーシッププログラムについて 募集説明会資料」
 - ・中山京子、東優也 (2017) 「海外体験学習における学びの変容と市民性」『大学における海外体験学習への挑戦』 pp.60-75
 - ・藤原孝章 (2017) 「海外スタディツアーにおけるルーブリックの作成と活用」『大学における海外体験学習への挑戦』 pp.45-59
 - ・箕面在弘 (2017) 「海外スタディツアーにおける授業づくり」『大学における海外体験学習への挑戦』 pp.26-44
 - ・横田雅弘、太田浩、新見有紀子編 (2018) 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト』学文社
 - ・龍谷大学 (2018) 「海外フィールド研修」(グアム)の現地研修と報告会を実施【経済学部】
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-1758.html> (2020.11.30閲覧)